
看病

流羽奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

看病

【コード】

N0483H

【作者名】

流羽奈

【あらすじ】

今日は花見の日。この日は仕事が全面的に休みなのだが、日番谷はそれを押し切って仕事を続ける。そんな日番谷に襲い掛かった、嬉しい悪夢。(日×離)

呼吸

綺麗に桜が満開に咲いたあくる日。

毎年のように行われている「花見」に、日番谷は渋々参加していた。

「たーいちよ」

手招きして、日番谷を呼ぶのは、日番谷の副官、乱菊である。

「…何だよ」

乱菊が猫なで声を出す時は、大概何かがあるということをし、日番谷はいい加減学んだ。

「お酒、飲みませんか？」

「は？」

「たまには仕事の事なんて忘れましょうよ さ、飲んで飲んで」

「…誰のせいで俺が仕事してると思ってたんだよ」

と、乱菊に言いながら、差し出された徳利を見る。並々と注がれた透明な液体が日番谷の目に映った。

「まったく…まだ仕事残ってたからな。これ飲んだら、俺はさっさと帰るぜ」

「飲んだら言っておさいよ、そう言うことは」

乱菊はくすりと笑う。かなり度数の高い酒だ、ということとは乱菊の表情を見て分かる。

実はこの酒、度数はかなりのもので、普通は水やお湯で割って飲む

のが当たり前だ。割らないで飲むと、先ほどから桜の木の陰で雛森に看病されている吉良のようにあつという間にべろんべろんになってしまう。

「さあさ、早いとこ飲んじやって下さい」

乱菊が何を考えているのかなんて分からないが、恐らく日番谷の酔うところを見てみたいのだろう。今まで酒を飲んでいる日番谷など、乱菊は見たことが無い。無論、酔っている日番谷も。

「…」

つまらなさそうに日番谷はその徳利に口をつけた。一瞬も止まることなく、その徳利の角度は見る見るうちに高くなっていく。

乱菊はこの様子を呆気にとられて見ていた。これだけの度数だと、どれだけの酒豪でも一瞬は動きを止めるだろう。しかし、日番谷にはそれが見られない。

ゴクリ、と飲んだ音が聞こえる。

喉が、上下に動いたのを乱菊は見たから、酒を飲んだことは間違い事なのだろうが…それにしても強すぎである。

「んじゃ、仕事に戻るぜ」

徳利を乱菊に手渡すと、日番谷は隊首羽織を翻してその場を足早に去って行った。その場に残された乱菊は、徳利を逆さにする。一滴も酒は垂れてこない。完全に飲み干したのだ、あの少年は。

「いやあ、凄い飲みっぷりだったね、日番谷隊長は」

京楽が呆気にとられて、そう呟いた。

「ですねえ……」

乱菊も、外見が少年だっただけに、まさか酒に強いとは思わなかったのだ。

「何だったんだ、あいつは……」

いきなり酒飲ましやがって、と苦々しく呟く。仕事に多少なりとも影響したら、とにかく困るのだ。どこかの誰かさんが溜めに溜め込んでいたたくさんの仕事が今になって発見されたのだから、本当はこんな酒を飲んでいる暇は無い。

ただ、今回は仕事をしてはいけない日。花見の日は、全面的に仕事が出来なくなる。総隊長が、花見を推進しているせいだ。

「つまらねえことを推進しやがって……」

何が休みだ、と椅子を引いて再度呟いた。

椅子に腰を掛けたその時、執務室の扉が、ぎい、と重々しい音をたてて開いた。

「日番谷隊長」

「総隊長……」

慌ててサッと立ち上がる。総隊長は立たんでも良い、と手で座るように合図をするが、日番谷は一向に座らない。

「何か、用ですか」

凜と引き締まった翡翠の瞳が、総隊長を捉える。総隊長はふむう、と鼻を鳴らし、髭を撫でた。

「今日は花見じゃ。たまには休んだらどうじゃ、日番谷隊長」

「いえ、俺はその…これを片付けないといけないんで」

自分よりも遥かに高く積み上げられた仕事の資料を見上げながら、そう言った。

「お主のその真面目さは俺もよく知っておる。じゃが、そう力を入ればなしではおいおいツケもたまってくるぞ」

「…そんな事…」

資料から、すい、と窓に視線を移す。窓からは、満開の桜が咲き誇っていて、ピンクで街は埋め尽くされていた。

「そんな事、百も承知つすよ。ただ、俺はこれが習慣みたいなモンなんで…仕事は俺の呼吸みたいなモンなんすよ」

苦笑して、そう言った。総隊長も、それを聞いて諦めたのか、納得したのか、とにかく「そうか…」と小さく呟いて、コツ、と杖を突きながら部屋を出て行った。

「さて、と」

筆に墨を含めた。

「始めるか…」

呼吸（後書き）

私が書いた小説を、多くの方々が読んでいるんだ…。
そう考えただけで本当に嬉しいです（^^*）

と！ いうわけで…今回は皆様にアンケートを実施しようと思いま
す

詳しくはこちら <http://ameblo.jp/runak>
k/

重石

文字が紙の上に現れていく。

手馴れた手つきでさらさらと滑らせるように、着々と。

仕事が減っていつているのは確実だ。

仕事をして、何時間経ったのだろうか。日が傾いてきた。夕日のオレンジが、桜のピンクを照らして、何とも綺麗で幻想的な絵を作り出している。しかし、この絵を見てから、その更に下に居る酒に酔っている者たちを見ると、その綺麗な世界が台無しだ。

日番谷は筆を置いて少し肩を回す。ぐるり、と右肩をまわして、ぐっと伸びをする。

そして再び、筆を手にとり、文を書き続ける。

書き始めたその直後。フツと文字が揺らいだ。ぐにやりと文字が様々な形になって、日番谷の眼中に入る。

「え？」

その異常事態に、思わず声を漏らした。

今までどんな長時間勤務をしても全くこんな事はなかったのだから、原因は一つしかない。

「…酒、回ってきたか…」

だから、飲みたくなかったんだ。

その言葉を口の中で言って、疲れたように目頭を軽く押さえた。

「全く、あんた達もうちの隊長くらいお酒に強くなれば良いのに」
「勘弁して下さいよ、乱菊さん…」

かろうじて意識もあり、会話にも参加していて、しかし既に死んだように倒れている吉良と、乱菊のお猪口にお酒を注いでいる檜佐木。それから恋次も指して、乱菊はそう言った。

「でも確かにそうだね。アレくらい強かったら僕ももつと楽しめるなあ」

京楽も乱菊に賛成していた。

何をばかな！ 檜佐木たちは声にならないその叫びを喉の辺りで食い止める。

しかし、やはりどストレートに者を言いたいこの男は、言葉をそこで食い止められなかった。

「強すぎなんスよ、日番谷隊長は。今頃執務室でぶっ倒れてるんじゃないですか」

恋次は酒の力も借りて、思った事をそのまま口にした。もともとこんな性格だ、酒が入った後と入る前でもさほど違いはない。

「それもそうよね、徳利一本、丸々飲んじゃったんだから」

普通の死神じゃできないわよ、と乱菊は檜佐木に注がれた酒を飲む。

「しかも一気よ、一気。一体どうしてんのかしら」

まさかアルコールを吸収しない身体じゃないだろうしねえ、と呑気な口調で、でも少し考えるように京楽はその言葉を口にする。

ここまで来て、お酒にめっぽう弱く、今まで会話にあまり参加していなかった雛森が口を開いた。

「日番谷くん、お酒は強くないんですよ」

と、突然言い出すものだから、全員の視線が集まるといっなのは自然の摂理で。

勿論、「ええっ!？」と驚いた声が聞こえるのも当然のこと。

「あたし、最近気が付いたんですけど、日番谷くん、アルコールの伝達がかなり遅いみたいで…」

途中で言葉を止めて、ハッと雛森は十番隊の執務室に視線を向けた。見る見るうちに顔色を変えていく。その様子を、不思議そうにみんなは眺めていた。

「どうしよう…!ごめんなさい、あたしちょっと席外します!」

「え、ちょ、雛森!」

慌てて立ち上がり、雛森はその場を駆けていった。

ガタンっ、と椅子が倒れた。その椅子の近くには日番谷が片膝を付いて息を切らしていた。

「ち…力…」

入んねえ、と呟こうとしたがそれすらが苦痛なくらい体がだるかった。肩に重石が乗ったように動かない。

全く、動きたくなかった。

かろうじて椅子には座ったが、それ以降の動きをしたくない。机に肘をついたところで、扉が開かれた。

無限

突然扉が開くものだから、うつらだった日番谷の意識も、ハッと元に戻る。

「日番谷くんっ！」

天変地異でも起こったんじゃないか。

それを連想させるほどまでに慌てている雛森が、日番谷の眼中に入った。

「どうした？ 雛森……」

ぼんやりと定まらない視覚の中、黒い影のように見える雛森に声をかけた。

その黒い影が声と霊圧からして雛森だ、というのは分かるが、視界がぼやけて表情までは読み取れない。雛森の声からして、とても慌てているのだ。

そんな事しか分からなかった。

「起立っ！」

「は？」

突然そんな事を言われても、何も理解できない。

何が「起立」だよ……。

そんな事して何になるかも分からないのだから、そもそもやる必要性がない。

…なんて事を言おうものなら雛森に怒られるだろうことは予想が付く。

頭がただでさえ割れそうなのだ。これ以上頭を痛くする理由を作りたくない。

「…立てばいいんだろ、立てば」

雛森の視線を感じてもあるのか、少し慌てて日番谷は立ち上がった。

…だからだろうか。

景色全体がぐらついて、まともに立つことが困難だった。足に力を入れれば大したことは無いが、長時間立つものなら確実に倒れる。そんなことが安易に予想できた。

「…そのまま、ね。動いたらだめよ」

「…なんでだよ…」

仕事があんだよ、という言い訳も聞いてくれず、雛森は日番谷の翡翠の瞳をじっと見つめる。

そのうつろな瞳を見て、鳩が豆鉄砲を食らったような顔を、雛森はした。純粹に、驚いたのだ。

「…もしかして、酔ってる？」

「なにが『もしかして』だよ。知っててやってんだろ、こんな事」

「うつん。あたしはてつきり熱でも出してるんじゃないかと思って」

「熱？ 俺は酒飲んだんだぜ？ 何で酔う前に熱出さなきゃならねえんだ」

だって、と雛森は言う。

「日番谷くん、お酒飲んだ後いつつも熱出してたじゃない」

「はあ？ 待て、俺がいつ、お前の前で酒なんて飲んだよ？」

「覚えてないかなあ？ 子供の頃…」

「雛森、どーしちゃったのかしら？ 女の子がいないとつまらないわあ」

乱菊は言って、ぐいっとお酒を飲み干し、はい、と檜佐木にお猪口を向ける。

これで何度目だろう。そんな事を考えるのも何度目だろう。…なんて事を考えるのも…と、無限ループが檜佐木の脳内で繰り返り広げられてるころ。

「隊長っ！ 隊長も日番谷隊長を見習って下さい！」

七緒が腰に手を当てて京楽に説教をしていた。

「良いじゃないの、七緒。今日はお花見よお？ 休まなきゃ京楽隊長だって倒れちゃうよお」

「そうそう。七緒ちゃん、そんな怒っていると眉間に皺が出来ちゃうよお」

呑気な二人の空気が、火に油だった。

「何言ってますかっ！ 乱菊さんが毎日のように誘いに来るからうちの隊は仕事が山のように溜まってますよっ！？」

今にも持っている辞書を投げつけてきそうな勢いだ。

いや、眼鏡かもしれない。

…そんなことはどうでも良くて。

京楽は七緒にあっさりと捕まり、引きずられて行ってしまった。

「あ〜ん、京楽隊長お〜」

唯一の酒飲み相手が居なくなり、乱菊の気分はどん底。

こうなると、飲めないものたちに無理矢理飲ませるしなくなってしまうた。

「…そうねえ、修平」

「はっ…はい！」

「あたしと飲んでくれるわよね？」

やっと酒が引いてきたと思ったのに。

そう思った矢先だった。

吉良はダメ。恋次もダメ。つまり、消去法だったのだろう。

これから、本当の無限ループが始まる。

ここで檜佐木が潰れたら、今酒が引き始めている恋次が犠牲になり、次に吉良、そしてまた檜佐木へ…という具合だ。

それを止めるには、乱菊を潰すしかない。しかし、この酒豪が、そんな簡単に潰れるわけが無い。つまり、道は一つしかないのだ。

「…喜んで」

過去

馬鹿かよ、俺は。何やってんだよ…。

はあ、と立つてるのをやめ、椅子にどっしりと日番谷は腰を掛けた。そんなくだらない事で酒を飲んだなんて、考えらんねえよ…。我ながら、大人げないと思う。いや、実際この頃はまだ子供だったのだが…。

「本当か？」

「ええ、ほんと」

未だに信用できないのか、疑ってかかっているのか、これを聞いたのも何度目になるだろう。檜佐木に負けず劣らず無限ループであろうくしゃくしゃと銀髪を片手で撫で回した。そのまま視界を崩しガンツ、と額をぶつける。

「~~~~~」

声にならない声で、日番谷は額を押さえた。細かく肩を揺らしているところを見ると、やせ我慢をしているのは確かで、さらに言うなら痛がっているのを見られないように顔を伏せている。

「もー、大丈夫？ 熱出すところかお酒も回ってるんじゃない？」

「っせえ…」

むくり、と腕から顔を覗かせ、雛森に言った。翡翠がうつろになり、もはやどこを捉えているのか分からない。黒い死覇装から覗いているその翡翠と、若干赤くなってきた日番谷の顔を見て、半ば強引に額に手をやる。

「あー、やっぱり」

言うや否や、その場に膝を付く。

日番谷は不機嫌そうに顔を横に向け、さっきよりも若干下にいる雛森を見やる。

「酒飲んだ俺が悪りいんだ、看病なんてしなくて結構だぜ」

「何言ってるのよ、看病するに決まってるじゃない。それじゃあ、あたしがここに来た意味が無いでしょ」

雛森が「氷水とタオル、持って来るね」と言っただけで部屋を出て行って、霊圧が小さくなったのをしっかり確認してから、日番谷は言った。

「…もう二度と酒なんて飲まねえ…」

照れ隠しなのかどうなのか自分でも分からないが、机の上で組んだ腕に、自分の顔をすっぽりと埋め込んだ。黒の死覇装から、銀髪だけが見える。

日番谷が幼少時代の頃…。

物置で、日番谷はボトルに入って、しっかりと、長年つけられていた杏酒を見つけた。

「なあ、ばあちゃん！ これ、飲んでいい？」

「それはお酒だからだめだよ、冬獅郎。大人になったら飲みなさい」

日番谷の祖母が、日番谷にそう言った。

「ちえっ…。美味しそうなのに」

ぷかぷかと浮かんでいた杏が、まるで手招きをしているかのように液体の中で踊っている。小さい頃の日番谷にとっては、それはとても魅力的なものだったのだ。

「だめよ、シロちゃん。これはお酒なんだから」
「うるせーなあ、分かってるよ」

そう言いながらも、自分よりもずっと高い位置にあるその杏が、本当に綺麗だったのだ。それはまるで泉に踊る妖精のように、空を駆けるペガサスのように、とても幻想的なものだったのだろう。なんせ、何もない流魂街での生活だったのだから、変わったものは全てそう見えてしまう。

「…誰も見てねーよな…」

ある日の昼下がり、日番谷は物置小屋に足を運んだ。そう、あの杏酒である。

そろそろ、と遠慮がちにドアを開けて、ばくばく高鳴る心臓を必死に押さえ込みながら物置の中に入った。…とは言ったもの。はるか高い位置にあるそれを、一体どうやって取るうというのか。

子供は、こういつときに悪知恵を働かせる。やけに、頭が冴えるのだ。

「よっよっ…」

そこらにあるものを次々と重ねて、バランスよく乗っていく。元々運動神経のいい日番谷だ。こんな事は容易に出来る。

両手でボトルを持ち、ぐらぐらと不安定に揺れるところに片足で器用に立つ。空いている足でバランスをとって、ぴょん、と飛び降りた。

「よっし！ 取れた！」

へへ、と得意げに笑い、そのボトルを地面に置いてキュポツ、と快音を慣らしながら蓋を開ける。まずは、ぷかぷか浮いている杏を一つ手にとった。オレンジ色のその実を見て、翡翠の瞳がいつもの倍、綺麗に輝いた。

「うめえ！」

杏を口に入れて、第一声がこれだった。

…お酒につけていた杏を美味しいということとは、もともと大人の味覚を持っている、という事なのだろうか。それとも性格が大人びているということなのだろうか。…いや、していることは確実に子供だから後者はありえないだろう。

「もう一個くらい…いいよな？」

辺りをちらちら見ながら、そろり、とボトルに手を入れた。

空の青とも、森の緑ともとれない、この世にあるとも思えないほど綺麗なそれが、大きく見開かれたのだ。

「こら！ 何やってんの、シロちゃん！」

「うわあっ！！！」

今日の日番谷からは到底想像できにくい声だ。

まだ子供だからだろうか、その声はまだ高く、アルトというかソプ

ラノである。後ろから声をかけられたら、確実に女の子だと勘違いしてしまうほどだった。

「飲んじゃダメって言われたでしょー！」

「べっ…別に飲んでねーよっ！」

…この頃から、口は達者なのだろう。

飲んでいけないのなら、食べる分にはまだいい。

…そう、捕らえたのだろう。

「大体、シロちゃんはまだ子供なんだから、お酒の味なんて分からないわよ」

「ふざけんな！ こんなもん、俺だって飲めんだよっ！」

「子供」。その言葉に、日番谷は嫌に反応した。

ムキになって、ボトルを両手で地面から持ち上げる。

そして、口元に持って行く。

「ちよっ…シロちゃん？」

何考えてるの、なんて訊かなくても、しようとしている事は確かだ。
飲もうとしている。

見つかってしまったからには、証拠隠滅をしようとしているのか。
そんな事を自分がしたという事がばれば、もっと大事になってしまうのは安易に想像できるだろうに、日番谷は全くためらわずにそれを傾ける。

「そんなムキにならなくても…」

声をかけたところで、止まるはずも無い。どんどんボトルは傾いて

いき、そして、喉がごつくん、と音を鳴らした。ぷはーっ、とポトルから口を離して息をはく。杏の匂いが、辺りを漂った。

「ホラ見ろ！ 人は見た目で判断しちゃ…」

視界が、ぐらりと揺れる。

雛森の顔が、二重にも三重にも重なって見えた。

「いけねえ…ん…？」

「シロちゃんっ…！」

そのまま、地面に倒れ込んだ。

看病

涼しい音が、横になった日番谷の耳に響いた。氷水の、氷がぶつかり合う音に、耳を澄ます。視界に、雛森らしき人物の、死覇装がちらりと入った。

「…ったく…」

額に左手首を、目を隠すように乗せると、そう呟いた。雛森はその声を耳に入れながら、タオルを氷水に浸した。水の音が、静かに部屋に響き渡る。

「今、昔の事思い出してた」

ポツリ、と日番谷がそう言った。雛森が「昔の事？」と訊きながら、額に真っ白なタオルをゆっくりと置いた。

「冷て…」

少し驚いたようにそう言う。日番谷はタオルを置かれても相変わらずその翡翠を隠しながら、普段通り淡々と話し続ける。呂律が回っているところから、やはりそこまでお酒は回ってないんだな、と雛森は思った。

「昔：俺が杏酒を飲んだ時の記憶が、一気に蘇ってきてやがった」

「ああ、あの時も、最終的にはこんな感じになってたわね」

雛森が、クスリと小さく笑った。その漆黒の黒髪が、するりと宙を揺れる。

「…うるせ」

手首を少しずらして、横目で雛森を睨んだ。しかしそれは、弟が姉を見るような、そんな視線だ。睨んだうちには、入らないだろう。乱菊を鬼の形相で睨む時とは大層な違いがある。鋭い翡翠が、優しい蒼に変わる。その瞳は、今度は兄のように、優しく雛森を見つめていた。

雛森が、日番谷のタオルを変えて、もう既に六回。時刻は午後五時をすぎている。太陽が傾き始め、夕日が桜を照らした。その言葉に表しように無い綺麗な景色を、雛森は十番隊舎の執務室の窓から見つめる。

「綺麗…」

ゆっくりと、瞳が細められた。夕日が、その黒い瞳に移り込む。こんな綺麗な景色を、日番谷にも見せてあげたいと思う。しかし、彼は今、静かに寝息を立てていた。起こしてはいけないと思いつつも、彼女は思わず言葉を漏らしていたのだ。それほど、景色が美しく、綺麗だったのだろう。

「ん…」

差し込まれた夕日に、日番谷が反応する。翡翠の瞳が、ゆっくりと開かれた。むくり、と何事も無かったかのように起き上がる。銀色に夕日のオレンジが反射して、これもまた綺麗な色であった。

「あ、ごめん。起こしちゃった…？」

「いや、別に…。それより、今何時だ？」

立ち上がった、腕をぐるりと回した。ついでに首も回して、死覇装の襟を正す。

「えっと…五時過ぎ、かな」

雛森が言うと、日番谷は「やっべ…」と小さく言って、スタスタと走ることなく、しかし歩いているという速さでもない絶妙な歩調で机へと向かった。

「ちょ、日番谷くん、何やってるのよっ!?!」

その言葉を無視し、日番谷は机の前で立ち止まって、資料の溜まり具合を確かめている。粗方の量を計算し、大体どれくらいの速さでやればいいのかを何となく見当をつけてから、口を開いた。翡翠が、雛森を諭すように、ゆっくりと見つめた。

「何って…仕事だよ。溜まってんのが分からねえのか、お前は」

「まだ熱、下がってないでしょ! ムチャしたらまた悪化…」

雛森、スタスタと心配しながら机に向かってきたとき、雛森に対して背を向けていた日番谷は雛森に向かい合った。同時に、前のめりに倒れてきた雛森の華奢な肩を両手で抱える。

「悪化してねえっつの。それよりお前、熱出てんじゃねーの」
「え?」

雛森の額に、日番谷の掌がスツと添えられた。

「昔と一緒にだな、こりゃ…」

はあ、とため息をつく。

「む…むか、し…？」

「覚えてねーのか？ お前、昔も俺の看病してて熱出してぶっ倒れて…。昔っから俺のこと心配するだけして、最終的には真逆の結末を迎えてんだよな」

呆れた、とでも言うように、その声は気が抜けていきそうなものだった。次の瞬間、軽々と雛森を抱えると、さっきまで自分が横たわっていた布団に静かに下ろす。タオルを濡らしながら、雛森の枕元に座り込んだ。

「馬鹿だろ、お前。自分が熱出すって分かってながら俺の看病してたんじゃないの？」

「……」

日番谷が額に乗せたタオルの位置を少し動かして微調整しながら、雛森は無言だ。しかし、顔にハッキリと「うん」だの「そうです」だの、肯定的なことが書いてある。表情に出やすい、素直な女の子だと、日番谷は思う。

「…ったく…。大人しく寝てろ。時間になったら部屋に戻してやるから」

静かに立ち上がると、机に向かう。さらさらと紙を滑る筆の音に耳を澄ましながら、雛森は瞼をそっと閉じる。

「日番谷くん」

「あ？」

ポツリ、と聞こえた雛森の声。日番谷は筆を止めて、雛森のほうを見る。風が、開いていた窓から静かに流れ込んでくる。銀髪が揺れた。

「…ありがとう」

それだけ言うと、雛森は布団をかぶって、そのまま日番谷に背を向ける。自分を看病してくれてありがとう、ということなのか、それとも、今までの事を振り返ってでのありがとう、だということなのか、定かではない。もしかしたら、両方の意味なのかもしれない。とにかく、日番谷は照れくさくなり、つい口から、口癖のように言葉が滑りだしてしまう。

「…うるせーよ」

その言い方が、普段と全く違う事を、雛森はしつかりと分かっていた。その言葉に安心したかのように、雛森はすう、と吸い込まれるように眠りについた。

それを確認したかのように、日番谷は優しく微笑むように口角を上げて、引き続き、資料の整理に当たる。

「…そっぴゃ…」

時刻は既に、八時を回っていた。資料の半分以上が片付いた頃だ。

「…松本…帰ってこねえな…」

筆を持ち上げて、窓を覗いてみた。夜桜が、綺麗だった。

「僕、もう飲めましえーん…」

吉良が、ふんどし一丁で酔いつぶれている。それを、ふらふらになりながらも冷めた目で見る恋次と、必死に乱菊とお酒で勝負している檜佐木。乱菊は相当な酒豪のようだ。やや頬が赤らめたくらい。

「アンタ達、しょーもないわねえ…。ほーんと、つまらないわあ」

だんつ、と地面に大量のお酒が入った徳利を乱暴に置いた。夜桜が、徳利の中にひらり、と舞い降りる。

「松本！ 何やってんだ！」

同時に、日番谷の罵声が聞こえた。乱菊が顔を輝かせ、日番谷の声が出たほうを振り向く。

「たいちよーっ 丁度いいところに…って…雛森はどうしたんです？」

「ああ、あいつか」

と、日番谷は十番隊舎の方を振り向く。

「置いてきた」

小さくポツリと言って、乱菊が今地面に置いたばかりの徳利をひっ

たくる。乱菊が「あっ!」という「表情をし、日番谷に視線を動かした。

「もらっぜ」

「え」

桜が舞い込んだお酒は、そのまま日番谷の小さな体に飲み込まれていく。呆気に取られて、その様子を見ているうちに、そのお酒は全くなくなっていく。

その様子を見てから、乱菊は思い出したように、日番谷に語りかけた。

「…さつき、雛森が血相変えて隊長のトコに行ったんですけど、それってなんなんですか?」

「ああ、あれか」

桜を見上げて、日番谷は言う。

「…また、看病してもらいてえからな」

f i n . . .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0483h/>

看病

2010年10月10日21時52分発行